

サービ斯拉ーニングを振り返って

社会福祉学部社会福祉学科2年 坂口 由里

活動先：NPO 法人 ゆめじろう

クラス：松下 典子 先生

私が6日間活動させて頂いたNPO法人は「ゆめじろう」である。ゆめじろうとは、武豊町にあり、障害者、お年寄り、子育てなど幅広い市民を対象とし、地域の課題解決に取り組んでいる団体である。活動理念として、「住み慣れたまちでふつうに暮らしたい」という事を掲げており、NPOならではの小回りの効くサービスを提供している。

活動するにあたって、まず目標を「職場の雰囲気や職員さんの一日の流れをつかむ事。利用者さんのニーズを理解すること」に定め、その事を頭に入れ、活動先では何がしたいのか、さらには自分には何が出来るのだろうかという事を考えた。

先ほども述べた通り、ゆめじろうの対象は幅広いが、私はその中でも自閉症児などの発達障害のある子どもを対象にした「こじろう」というサービスに関わらせてもらった。ここでは、お楽しみ企画を自分たちで考え行った。この企画を通して、すごく痛感したことがある。それは、「準備の大切さ、大変さ」である。企画はかき氷とタコ焼きと言ういたってシンプルなものだったがそれでも大変だと感じた。企画を実行に移すまでには何段階もの手順がある。まず、誰を対象にどんな企画が行いたいと言う事を考え、それを活動先の人に伝える必要があった。しかし、それも安易ではなかったのである。なぜなら、「対象者理解」が不十分であったからだ。この企画はあくまで自分達の為に行うものではなく、利用者さんの為に行うものである。つまりその方達の事を理解していなければ、いくら計画したところでズレが生じてしまうのだ。だからこそ、対象者理解が出来ていない自分にとって、企画が定まらず難しく感じたのだろう。結局、数少ない案だけでは、対象者には合わないから出来ないとなる可能性が高いと感じた為に複数案を持ち寄り、職員さんにどの企画なら実現可能かを選んで貰う事となった。あの時はたくさん案を出した事で満足してしまっていたが、今思えば、それはただの甘えであり、事前に関わる利用者さんについて学んでおくのが活動先にも関わる利用者さんに対しても最低限の心がけではなかったのかと感じている。その後も企画をつめる為に何度か打ち合わせを行ったが、自分達でも曖昧なままのものを持ち寄り、後は流れに任せると言った受け身の姿勢だったと感じている。しかし、途中でその事に気づき、これではダメだと思い、これまでの学びから単に「これがしたい・あれがしたい」という願望だけでなく、それをなぜしたいのか、実現するにはなにが必要なのか、など事柄の周辺まで視野を広げ、まだまだ不十分ではあったが自分から問いかけるという事が出来、自分自身取り組む姿勢が成長したのではと感じた。

また、その事より「現場に出るとはこういう事か」と、なんとなくではあるが感じたのである。つまり、「現場」とは常に今を見ると同時に何歩も先を捉え、あらゆる可能性について吟味しそのことを自らが問題提起し、形にする所まで行うのだ。学校で座って行う勉強だけでは、考えて終わることが多くそれを形にまで持っていく事はほとんどない。実際、報告会でも「学生だから許されるという気持ちでは迷惑がかかる」と言っていた活動先の

方がいたが、この事もそれに当てはまる一つの「学生スタンス」だったのだと気付いたのである。

私がおこなった活動内容としては、大きく分けて二つある。まずは、上記でも述べたような、お楽しみ企画をメインとした、「こじろう」での活動である。そしてもう一つはサロンでの宣伝である。

まずこじろうの方だが、企画以外ではその前後で子ども達と関わらせてもらった。正直自閉症児に関わるのが初めてで全く接し方が分からず、パニックを引き起こさせてしまったらどうしようなど不安に感じていた。しかし、短い時間ではあったがすぐに不安はなくなったのである。一言で言えば、言い方はあまり良くないかもしれないが、ふつうの子どもだったのである。今まで関わりがなかった為にどこか特別感を感じてしまっていた。しかし、少しの配慮は必要とはいえ今まで私が関わった事のある子ども達とほとんど変わらないと感じた。むしろ、初め緊張し戸惑っていた私を子ども達の方が引っ張ってくれていたように感じる。この事より、障がいがあっても環境を整えれば普通に生活出来るという事、さらにはそれ以前に私と同様に関わりがない為にイメージだけが先行してしまっている人は多くおり、その事が障がい者を社会から追いやり、小さな一角へと押し込めてしまっているのではないかと感じた。だからこそ、もっともっと社会との接点を持てる機会が必要だと感じた。

次にサロンでの宣伝を行った。ゆめじろうは創立10周年という事で、10周年記念事業を計画しており、その宣伝を手伝わせてもらった。マスコットである「ゆめじろう君」の着ぐるみと共にパラパラを踊った。実はサロンという存在自体初めて知ったのだが、実際に行ってみたところ、予想以上の高齢者が集まっており驚いた事を覚えている。それと同時にこんなにもたくさん的高齢者がみんなとの時間を共有できる場を必要としているのだと気付かされた。実際に今は無縁社会という言葉がある程人と人の関係が希薄になっている。こういう場所に来て初めて近所にこんな人が住んでいたのだと分かる事もあるのではないかと感じた。しかし、よくよく思い返してみると、高齢者は高齢者、子どもは子どもと言った対象別のものが多いのではないかと感じた。実際のくらしで考えるともっと不特定多数の人と関わりがあってこそ社会や地域に住んでいると言えるのではないかと感じた。つまりこれからは、様々な人が入り混じった、より「くらし」に近い居場所づくりも必要ではないかと感じた。

最後に、今の段階で私から見てNPOとは何かについて述べたい。まだまだわからない事も多いが、いくつか特徴をあげるとすれば、「①行政では出来ない小回りの効くサービスが出来る・②住民と対等の立場から物事を見て働きかけている・③つながりの拠点である」と言う事ではないかと私は感じた。NPOは行政だけでは不十分だからこそそれを補う為に制度外という手段を持って、小回りの効くサービスを提供している。さらに、それを同じ住民という視点から常に問題をキャッチ出来る距離感で活動している。しかし、問題に次々と対応してしまうとこれまで作ってきたサービスがまた手薄くなってしまいう危険も否定できない。NPOとして活動するにあたって小回りが効くという利点と手薄くならないサービスの両者のバランスがこれからの課題であると感じた。また、つながりの拠点である、という事であるが、NPOも人と同じで元々つながりが存在する訳ではない。個々で

はなかなか作りにくいつながりを団体を通して構築しているのである。その為NPOだからと言って、それだけで地域との関わり、つながりが無ければ人と言う孤立状態と同じとも言える。時間をかけ、積極的に地域に働きかける事によって、地域全体のつながりを構築出来、NPOの特性を充分にいかした住民主体の地域づくりにする事が出来るのだろう。